琉球大学学術リポジトリ

教員養成課程の学生の小学校英語に対する不安の分析

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2022-10-04 キーワード (Ja): 小学校英語, 不安, 苦手意識, 教員養成, 成功体験 キーワード (En): 作成者: 津田, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019469

教員養成課程の学生の小学校英語に対する不安の分析

津田　敦子*

An Analysis of Trainee Teachers' Anxiety about Teaching English at Elementary School

Atsuko TSUDA*

要　約

本研究の目的は，小学校教員養成課程で学ぶ学生の英語に対する意識の変化と小学校英語に対する不安を分析し，彼らの不安を軽減するために大学で何をしたらよいかを考察することである。「初等外国語教育法」を2021年度後期と2022年度前期に受講した学生121人を対象とし，小学校から現在に至るまでの英語に対する意識の変化と学習歴や小学校英語に対する不安の記述回答を分析した。その結果，小学校英語に対する不安について５つの要素が抽出されたが，ほとんどすべて英語に対する苦手意識と自信のなさに起因する不安であることがわかった。教員養成課程の指導で，学生の英語に対する苦手意識と自信のなさを取り除いておく必要があり，そのためには学生自身が，英語を使って成功体験をし，「コミュニケーションの楽しさや意義」を味わう必要があると結論付ける。

キーワード：小学校英語，不安，苦手意識，教員養成，成功体験

１．はじめに

学習指導要領が改訂され，2020年度から小学校３，４年生で外国語活動（早期化）が，５，６年生では教科としての外国語科（教科化）が開始された。小学校に英語が導入されて以来，指導者の養成と研修は常に重要な課題であり，様々な研修が実施されてきた。多くの小学校教員は，これまでに英語教育について専門的に学んだ経験が少なく，小学校における英語の授業に対して多くの不安を抱えていることが明らかにされているが，研修によってその不安が軽減されたという報告も多くなされている。

一方大学の教員養成課程においては，「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2017）を踏まえて授業を進めている。現在教員養成課程で学んでいる学生は，すでに児童として小学校英語を経験してきた世代であり，大学でコア・カリキュラムに網羅されているような外国語（英語）指導についての専門知識を学んでいる。では，この学生たちが教員になったとき，教員の小学校英語に対する不安は過去よりも軽減されているのであろうか。大学の教員養成課程での学びをどのように充実させれば，将来の小学校教員の英語指導に対する不安を軽減できるのであろうか。そこで，本研究では，小学校教員養成課程で学ぶ学生の英語に対する意識と不安を分析することで，大学で小学校英語に対する不安を軽減するために何をしたらよいかを考察したい。

２．先行研究

2010年に実施された「第２回 小学校英語に関する基本調査：教員調査」（ベネッセ教育総合研究所，2011）によると，英語活動の指導に自信がある教員は３割で，多くの教員が指導への自信が持てない，また，指導に負担を感じている教員は６割を超えるという結果であった。しかし，校内研修を受けた時間が長くなるほど，「自信がある」の回答は増加しているという結果も報告さ

* 琉球大学教育学部

れている。この調査においては，教員が指導上，必要と感じる研修は，「指導法（歌，チャンツ，ゲームの進め方など）」87.8％，「英語力（クラスルームイングリッシュなど）」60.5％，「教材作成」47.3％など，英語活動の指導実践にすぐに役立つ内容があげられていた。また，その調査の解説・提言３（金子, 2011）においては, 06年調査時点では，「指導する教員の英語力」がもっとも課題視されていたが，10年調査になると，「教材の開発や準備のための時間」「ALTなどの外部協力者との打合せの時間」などの時間面が課題として認識されていることから，これまでの英語力程度で，必ずしも研修を積まなくても，「英語ノート」やデジタル教材を活用しながら外国語活動は遂行できるという現状認識がうかがえると述べられている。

しかし，その後，2020年の英語の早期化と教科化が文部科学省から発表され（文部科学省，2013），小学校における指導体制強化や学級担任の英語指導力向上が求められるなど，小学校教員には新たな不安と負担を生む結果となっている。米崎他（2016）は教科化と低学年化に対する小学校教員の不安の記述式回答をKH Coderを用いて計量分析を行った。その結果，20年前の小学校英語導入期から問題視されていた【教員の英語力・指導力】という従来からの不安に加え，【国語科・他教科とのバランス】，【児童の負担・混乱】，【評価】や【小学校英語教育の本質への理解】といった新たな不安が加わったことを指摘している。

及川（2019）は，2020年度よりも前に英語教育の強化事業を通じて教科化，低学年化，授業時数増加を経験した小学校教員を対象にアンケートを実施した。その結果，多くの回答者が自身の英語力が十分ではないと認識し，３, ４年生の場合で約３分の１が，５, ６年生の場合で約60％が指導力に自信がないと回答していることを示し，小学校教員の英語力と英語授業の指導方法の向上に直接寄与する研修などが必要であると述べている。また回答者が国や自治体に求めていることは，研修（指導法，評価方法，英語力，中学連携，他教科との連携）と補助（ICT教材，予算増加，教師用指導書，英語専任，クラスサイズ，授業以外の業務減少）であることを明らかにした。ここから，依然多くの小学校教員が英語力や指導力に自信がないと感じていること，小学校教員が求める研修の内容がより高度で複雑なものになってきていることが読み取れる。

小学校教員の不安や負担が増し，研修や補助のさらなる充実が求められる中，町田･内田（2015）は，教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修を開発し実施している。その結果，研修前の段階で自らの英語能力に不安を感じていた教員は39名中33名（84.6％）であったが，研修後には16名（41.0％）に減少し，さらに，事後アンケートでは英語でのコミュニケーションに対する積極的な意見が多く見られ，研修が教員の外国語不安の軽減に効果的であったことを報告している。そして考察の中で，教員の外国語不安の軽減に効果があった要因として，具体的な指導技術やクラスルームイングリッシュを学んだこと，英語の母音と子音の発音記号を全て発音できるように繰り返し練習したこと，外国人留学生と英語でコミュニケーションを図る活動を多く取り入れたこと，外国人留学生との模擬授業を全員参加にしたことなどをあげている。

教員養成課程で学ぶ大学生の「指導への自信」「不安」を調査したものとして, 松宮・森田（2016）は，教員養成課程で学ぶ大学生を対象に，英語母語話者とのティーム・ティーチング形式での模擬授業を実施し，英語力に関する不安は依然として残るものの，授業づくりや協同して指導にあたる方法を学ぶことで，参加大学生の指導への自信が高まることを明らかにした。松宮・森田（2016）でも述べられているように，指導者の不安軽減や自信の獲得は重要な課題であり，それは現職教員研修と合わせて教員養成においても意識されるべき点である。教員養成課程における学びをより効果的で充実したものにするために，学生が現在抱いている不安を分析し，現職教員の不安や要望，研修での成果を参考に，学生の現在の不安や将来生じうる不安をいかにしたら軽減することができるかを考察することは意義が大きいと考えられる。

３．調査

⑴　調査の背景と経緯

本学では小学校外国語教育を扱った講座を図１のように４科目（各２単位）開講している。「初等外国語教育法」では, コア･カリキュラムの「外

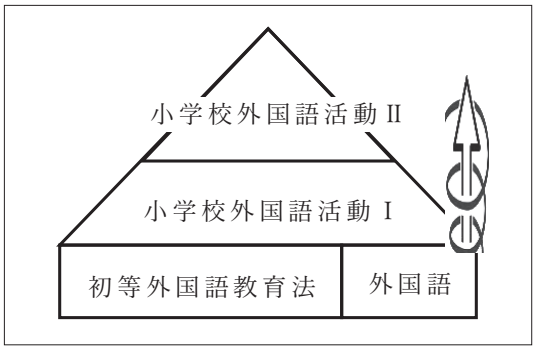

図１　小学校外国語教育を扱った講座

国語の指導法」の内容を，「外国語」では，コア・カリキュラムの「外国語に関する専門的事項」の内容を扱っている。この２科目が小学校教員を目指す大多数の学生の必修科目となっており，履修順序はさまざまであるが，２回生以上がほぼ全員履修することになっている。「小学校外国語活動Ⅰ・Ⅱ」（一部コースの学生のみ必修）では，課題解決型単元づくり・授業観察・模擬授業といったより実践的発展的な内容を扱う。特に「外国語」の授業においては，十分に時間は取れないものの，英語力の向上にも力を入れ，毎時間ペアやグループでSmall Talkをしたり，本学のe-learningを課題として課したりしている。

昨年度後期に「初等外国語教育法」と「外国語」の授業を進めながら，簡易のアンケート調査を数回行い，学生の不安の変化を確認した。表１は，講座の最終に近い回での回答結果である。半期15回の授業を受け，小学校外国語教育に関する最低限の専門的な知識を得ており，「外国語」では英語を使用しながら模擬授業も行った。模擬授業では，ミス等は見受けられるものの，英語の文法や

表１　外国語活動・外国語科の授業や英語に対する学生の期待と不安

質問項目	選択肢		初等外国語教育法 n（%）		外国語 n（%）	
①外国語活動・外国語科の授業をすることに対する期待	1	以前より楽しみ	14	(50)	22	(56)
	2	以前同様楽しみ	8	(29)	12	(31)
	3	以前同様楽しみでない	6	(21)	5	(13)
	4	以前より楽しみでない	0	(0)	0	(0)
②外国語活動・外国語科の授業をすることに対する不安	1	不安が軽減した	15	(54)	10	(26)
	2	以前同様不安なし	1	(4)	5	(13)
	3	以前同様不安あり	11	(39)	24	(62)
	4	以前より不安	1	(4)	0	(0)
③外国語活動・外国語科の授業で自分が英語を使うことに対する不安	1	不安が軽減した	12	(43)	8	(21)
	2	以前同様不安なし	3	(11)	4	(10)
	3	以前同様不安あり	12	(43)	26	(67)
	4	以前より不安	1	(4)	1	(3)
④Small Talkや英語で授業の一部やアクティビティをしてみて，今英語または英語でのコミュニケーションが楽しいか	1	以前より楽しい	12	(43)	17	(44)
	2	以前同様楽しい	8	(29)	15	(38)
	3	以前同様苦痛	8	(29)	6	(15)
	4	以前より苦痛	0	(0)	0	(0)
⑤Small Talkや英語で授業の一部やアクティビティをしてみて，今英語または英語でのコミュニケーションに対する不安はあるか	1	不安が軽減した	14	(50)	13	(33)
	2	以前同様不安なし	3	(11)	4	(10)
	3	以前同様不安あり	11	(39)	21	(54)
	4	以前より不安	0	(0)	1	(3)
⑥ 英語学習に対する意欲	1	意欲が増した	13	(46)	19	(49)
	2	以前同様意欲あり	11	(39)	17	(44)
	3	以前同様意欲なし	4	(14)	3	(8)
	4	意欲が減少した	0	(0)	0	(0)

注）初等外国語教育法 n=28（受講生42名，諸事情で28名分の回答しか回収できていない）
　　外国語 n=39（受講生41名）

発音は，どの学生も標準レベルで，特に悪いことなどない。しかし，表１の網掛け箇所から読み取れるように，多くの学生が何らかの不安を抱えたまま，これらの講座を修了したのである。しかも，現職教員が長年抱いている「英語力の不安」を軽減しようと，より英語力向上に焦点を当てた「外国語」の方が，学生の不安は軽減していないように見える。そこで，学生の抱いている不安を軽減するための対策を見出すために，今回の調査を実施することにした。

⑵　調査の目的

本学の小学校教員を目指す学生の英語学習歴や英語に対する気持ちの変化と，小学校で英語を教えることへの不安を分析することによって，学生の抱いている不安を軽減するための手立てを考察することを目的とする。

調査では以下の２点を明らかにする。

RQ １）小学校教員を目指している学生はどのような英語学習歴を持ち，英語に対する気持ちはどのように変化してきたか。

RQ ２）小学校教員を目指している学生は小学校で英語を教えることに対してどのような不安を持っているか。

⑶　調査対象者・調査時期・調査方法

調査は，2021年度後期と2022年度前期の「初等外国語教育法」の受講者を対象に実施した。対象者は，2021年度後期が１クラス42名（２回生35名，３回生６名，４回生１名），2022年度前期が２クラス79名（２回生46名，３回生27名，４回生６名），計121名である。

2021年度後期は，10月の第１回目の授業のオリエンテーションをオンラインで実施し，学生は，Zoomの投票機能を使って，小学校から現在までの英語に対する気持ちの変化を５件法で回答し，その結果を全員で確認した。英語学習歴や小学校で英語を教えることへの不安については後日授業外で記述回答し提出した。2022年度前期は，対面で授業を実施しており，第１回目の授業のオリエンテーションで，英語に対する気持ちの変化を挙手で確認した。学生は，後日授業外で，英語に対する気持ちの変化（５件法）と英語学習歴や小学校で英語を教えることへの不安（記述）について回答し提出した。この質問紙は，学生にとっては自分の学習歴を振り返ることでよりよい英語指導を考えるきっかけとすること，教員にとっては受講生の実態や要望を把握することを目的としたものであり，オリエンテーションでその目的を説明した。

今回の調査ではこの質問紙の一部を分析対象とした。まず，SPSS ver.27 を使用して量的分析を行い，５件法の回答の相関関係を確認した。次にKH Coder 3[1]を使用して記述式回答を質的に分析した。共起ネットワークによって頻出語や単語同士の結びつきを可視化し，記述式回答の客観的解釈を試みた。

４．結果と考察

⑴　学生の英語力

英語力のテストはしていないので，実際の英語力はわからないが，自己申告による資格取得状況は表２のとおりである。TOEIC等他の資格試験の点数を書いている学生もいたが，少数であったのでここでは割愛する。「小学校教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2017）では，「小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR B1レベルの英語力を身に付ける。」とあり，英検であれば２級以上が求められている。表２では，学生の３割しかこの基準を満たしていないことになるが，この取得状況の大半は大学入学以前のものであると推測され，逆の見方をすると，英語が専門でない小学校教員養成課程の学生の６割近くが大学入学時点で準２級以上を保持しているのである。少なくとも大学入試センター試験または大学入学共通テストの英語を受験して入学してきた学生であり，大学での取り組み次第で，コア・カリキュラムに示された基準に到達することができると考えられる。

表２　英検の取得状況

級	n
準１級	1
２　級	36
準２級	33
３　級	15

⑵　学生が経験した小学校英語

学生は，2011年に小学校高学年で「外国語活動」必修化が完全実施された当時，ちょうど小学校中高学年であった世代である。「第２回 小学校英語に関する基本調査：教員調査」（ベネッセ教育総合研究所，2011）で報告されているのと同様，多くの学生が低中学年から小学校で英語の活動を経験している（表３）。

表３　小学校での英語の開始時期

開始時期	n
高学年	38
中学年	42
低学年	25
不　明	19

「小学校英語はどのような内容であったか」「小学校で英語を好き・嫌いになった理由やきっかけは何だったか」という質問の記述式回答をKH Coder 3を使って分析[2]し，共起ネットワーク（図２・図３（巻末資料））で表した。図２から，ALTの先生と簡単な単語を使いながらゲームをしたり歌を歌ったりした，友達と会話をしながら楽しく学んだことなどが印象として残っている様子がわかる。それは，「第２回 小学校英語に関する基本調査:教員調査」(ベネッセ教育総合研究所，2011）の「英語活動の内容は，「英語のあいさつ」「ゲーム」「英語の歌やチャンツ」「会話練習」「発音練習」などの頻度が高い。」という報告と一致するものである。図３からはそのような活動のおかげで，英語が楽しく好きだった様子がわかる。ただその教員調査では,「ほぼすべての学校で「学級担任」が授業にかかわるようになった。中心となる指導者も「外国語指導助手（ALT，AETなど)」から「学級担任」へと移っている。」となっているが，実際にそうであったとしても学生の記憶の中では圧倒的にALTの先生の印象が強いようである。記述式回答に「小学校の英語の授業の記憶は，ゲームをしたことしかないため，具体的な指導方法がわからない」「英語をスラスラ話したり正しい発音ができるか」とあるように，学生は，自分が担任として英語の授業を進めるというイメージが抱けなかったり，ALTの先生をモデルにして彼らのように英語を発話したり発音したりできないと思ったりしているのかもしれない。それらが直接の不安になることはなくとも，不安を助長している可能性はある。

⑶　学生の英語に対する意識の変化

小学校から現在にかけての英語に対する意識の変化を調査するために，学生に以下の質問に５件法で回答してもらった。その結果が表４であり，図４（巻末資料）はその変化を帯グラフで表したものである。

① 小学生の時，英語が好きでしたか，嫌いでしたか。
② 中学生の時，英語が好きでしたか，嫌いでしたか。
③ 高校生の時，英語が好きでしたか，嫌いでしたか。
④ 英語が好きか嫌いか，今の英語に対する感情を答えてください。
　好き←　5　4　3　2　1　→嫌い

⑤ 小学校で英語の授業をするのが楽しみですか。
　楽しみ←　5　4　3　2　1　→楽しみでない

小学校で，５（好き）４（どちらかといえば好き）がほぼ80％であったものが，中学校で50％に落ち込み，これは平成26年度「小学校外国語活動実施状況調査」（文部科学省，2015）とほぼ同じ数値であった。そして高等学校でさらに25％にまで落ち込み，１（嫌い）２（どちらかといえば嫌い)が50％以上になっている。表５にあるように，高等学校と現在の意識は相関が高いことから，高

表４　英語に対する意識

	5 n（%）	4 n（%）	3 n（%）	2 n（%）	1 n（%）	平均
小学校	50（41）	43（36）	18（15）	5（4）	5（4）	4.1
中学校	25（21）	36（30）	26（21）	27（22）	7（6）	3.4
高等学校	7（6）	23（19）	27（22）	40（33）	24（20）	2.6
大　学	10（8）	35（29）	35（29）	29（24）	12（10）	3.0
楽しみ	16（13）	29（24）	41（34）	24（20）	11（9）	3.1

校時代のネガティブな意識を引きずったまま今に至っている学生が多いことが読み取れる。

ただ学生の英語に対する感情が大学でかなり回復してきていることに注目したい。感情が好転した学生の記述のいくつかを以下に示す。

- 大学の英語のネイティブの先生のとてもハードな，でも，授業で話したり実践的な英語にめちゃくちゃ楽しい！と感じるようになった。
- 留学の経験がやはりとても大きく，私の中の価値観までもかえるものだった。私が英語が楽しいと思うその瞬間には必ず英語でのコミュニケーションが行われている。英語で話すことが本当に大好きだと思う。
- 活発なアクティブラーニングを通して人生の中で一番英語が好きになっているレベル。
- 大学英語が楽しくて，英語が楽しいと感じた。
- バイト先で英語を使って接客し，苦戦しながらも英語の必要性と興味を感じた。
- 大学の授業では人とコミュニュケーションを取りながら学ぶことが多かったので楽しかった。
- つたない英語でもコミュニケーションすることを大事にしていた先生だったので，久しぶりに英語で話すことが楽しかった。
- 留学生の方と話す機会があり，英語が実用的だと感じることがありました。今までは試験のための勉強をしていましたが，その考えが変わり，楽しさから勉強に向かうことができてきている気がします。
- 授業で英語圏の生徒としゃべる機会があった。英語を話せるように練習していた。楽しかった。
- 自分の好きなことを英語を使って人に伝えることが楽しいと感じた。
- 学食で外国からの留学生の方を見て英語が話せるようになりたいと思い，英語に興味が高まる。

物井（2013）は，先行研究からも，実施した意識調査の結果からも，大学生のlearner beliefを変容させることの難しさを述べているが，上記の結果は，大学でのlearner beliefの変容の可能性を示唆するものであった。澁井（2019）も，小学校教員養成課程において，自分が受けてきた英語の授業によって感じているネガティブなイメージを変えることができたことを明らかにしており，英語使用に自信の持てるようなチャンスやサポートがあれば，大学生になってからでも十分learner beliefを変容させることができるようである。

表５は，「英語に対する意識」と「小学校で英語の授業をするのが楽しみであるという前向きな感情」との相関関係を表している。その前向きな感情は，現在の英語に対する意識と相関があるという結果であった。つまり，過去にどのような学習歴を持っていようが，どのような感情を抱いていようが，現在英語に対して前向きな感情を抱くことができれば，小学校で英語を教えることに対して前向きに取り組めるということになる。

⑷　学生が小学校で英語を教えることに対して抱いている不安

「小学校で英語を教えることの不安について，不安はありますか。ある場合，何を不安に思いますか。」という質問に対してほとんどすべての学生が「ある」と答え，その不安を記述回答した。記述された不安について，KH Coder 3を用いて計量テキスト分析を行った。分析の第１段階で，回答者の意図を損なわない範囲で表記と表現の統一[3]を図った。また強制的に１語として取り出す語[4]，一般的で無駄な密集を招くために分析から排除すべき語[5]を選び，強制抽出と除外の処理を行った。

総段落数126（総抽出語数2,903語，異なり語数396語）を分析対象とし，４回以上出現した単語同士の共起ネットワークを作成した（図５（巻末資料））。そこから５点の不安を読み取ることができ，【①英語に対する苦手意識と自信のなさから生じる不安】【②話す際の発音と文法への不安】【③英語の知識のなさへの不安】【④指導法に関する不安】【⑤ALTの先生とのコミュニケーションについての不安】と命名した[6]。

表５　英語に対する意識と小学校英語への意欲の相関

	小学校	中学校	高等学校	大学	楽しみ	M	SD
小学校	—	.397**	.249**	.358**	.448**	4.0579	1.05117
中学校		—	.330**	.364**	.345**	3.3719	1.20507
高等学校			—	.693**	.384**	2.5785	1.17439
大　学				—	.590**	3.0165	1.12534
楽しみ					—	3.1240	1.15159

** $p < .01$

① 英語に対する苦手意識と自信のなさから生じる不安

「子ども」「楽しい」「授業」「教える」「伝える」が含まれている回答を確認すると，「英語を初めて学ぶ子ども達にとって好きになってもらえる授業ができるか」「どのようにして英語の楽しさを伝えられるか」「楽しいだけの授業で終わってしまい子ども達に何も身につかない授業になってしまうのではないか」などという記述が並んでいる。これらは「初等外国語教育法」を受講する学生にスタート地点でぜひ持ってもらいたい問いである。

ただ問題は，共起ネットワークで「自分」が強く結びついており，上記の文に「自分が英語が苦手で嫌いである，自分の英語力が足りていない，自分が英語を理解できていない，自分の英語力に自信がないのに」がついているのである。小学校英語の授業をどのように展開していけばよいかという問いの背後に，英語に対する大きな苦手意識と自信のなさが存在していることが確認できる。

② 話す際の発音と文法への不安

「発音」「正しい」「話す」「文法」「理解」が含まれている回答を確認すると，「発音を詳しく教えてもらったことがないので，正しい発音で教えられるかが不安」「間違った文法を使用してしまわないかという不安」「正しい文法・発音を気にして話すことができなくなってしまう不安」などの記述がある。これらは知識としての文法や発音ではなく，子ども達の前で英語を発話することを意識した内容である。これまでの英語学習で「話す」という活動をあまりしてきていない場合，子ども達の前で英語を話すことに対する心理的なハードルは高いと推測される。

③ 英語の知識のなさへの不安

「知識」が含まれている回答を確認すると，「自分の持っているものが正しい知識であるか不安」「自分の英語の知識が全然ないので不安」「子ども達に英語を教えられるほどの知識を持っている自信がない」などの記述が並び，ここでの知識はかなり幅が広く漠然としたものであることがわかる。そしてその知識を持ち合わせていない自信のなさから，「子ども達に英語を好きになってもらえるような指導ができるか」という不安が生じる結果となっている。

④ 指導法に関する不安

「指導」が含まれている回答を確認すると，「子ども達に英語を好きと思ってもらえるように指導ができるかどうか不安」「小学校の英語の授業の記憶は，ゲームをしたことしかないため，具体的な指導方法がわからない」などの記述がある。ほかには「教える内容への難易度設定」や「結局日本語に頼ってしまいそう」「日本語を使わずにほとんど英語だけで授業ができるのか」というような「日本語の使用」，「難しい単語をどれだけかみ砕いて簡単な単語で説明できるか」というようなパラフレーズに関する不安などが挙げられていた。

⑤ ALTの先生とのコミュニケーションについての不安

主には「英会話が苦手な自分が，ALTの先生と意思疎通ができるか不安」というような記述であったが，英語への苦手意識から，英語でのコミュニケーション全般への不安も述べられていた。

以上５点は，すべて英語に対する苦手意識と自信のなさに収束する不安である。④は指導法とは言うものの，個々の記述を読むと結局授業内での英語の使用への不安に行き着く。仮に中高時代に国語や数学が苦手であったとしても，これほど小学校で指導することに不安を抱くことはないのではないだろうか。学生は今後小学校英語について専門的な知識を学ぶにつれて，現職教員が挙げているような評価やICT活用など新たな不安を抱く可能性があり，実際に教員になって教え始めると，さらにさまざまな問題に直面することになるであろうが，根本的に英語に対する苦手意識が指導に対して多大な不安を引き起こしているのである。また，４⑵で述べたように，実際にはそれほど英語力がないというわけではないはずだ。Horwitz（1996）が，‘foreign language anxiety is not the result of a rational analysis of one’s actual target language abilities’と述べているように，外国語不安は必ずしも本人の英語力と関係がある

わけではなく，ある程度英語力があっても外国語不安を抱いてしまっている可能性がある。

また，Horwitz（1996）は，教師は外国語不安のせいで目標言語の使用を避け，その結果，授業中に学習者が目標言語に触れる機会が減ると述べている。指導者はスモールトーク，クラスルームイングリッシュ，ティーチャートークなどを通して，児童にできるだけ大量の良質のインプットを与えることが必要である。また特に担任が英語を使うとき，児童にとって良きロールモデルとなる。そのため，教員養成課程では，何よりもまず，学生が児童の前で自信を持って英語を発することができるよう，外国語不安を取り除いておかなければならない。小学校英語についての専門的知識を与えたり，英語力の向上を図ったり，教員養成課程でしなければならないことは多いが，最優先でしなければならないことは，学生が今抱いている不安を解消すること，つまり学生の英語に対する苦手意識を取り除き，自信を回復することである。

5．終わりに

小学校で英語を教えることの不安についての記述式回答を分析することによって，学生の不安のほぼすべてが英語に対する苦手意識と自信のなさに起因するものであることが確認された。しかし，この英語に対するネガティブな感情が，大学での指導次第で好転する可能性も示唆された。そして，大学で英語に対して前向きな感情を持つことができれば，将来小学校で英語を教えることに対しても前向きな気持ちで取り組めることがわかった。その時真に，「どのようにして子どもたちに英語の楽しさを伝えられるか」「どのような授業をしたら子どもたちは英語を好きになるか」という本来考えるべき課題に取り組むことができるにちがいない。

「初等外国語教育法」の授業では，先生が「コミュニケーションの目的や場面，状況の設定」し，子ども達に「コミュニケーションの楽しさや意義」を体験させる必要性，成功体験をさせる必要性を説いてきた。しかし，学生自身が英語を使ってそのような体験をしたことがないのではないか，あるいはそれを忘れてしまっているのではないだろうか。学生が英語に対する苦手意識を払しょくし自信を取り戻すためには，まず学生自身が，英語を使って成功体験をし，「コミュニケーションの楽しさや意義」を味わう必要があったのである。

町田・内田（2015）や松宮・森田（2016）の研究において，外国人留学生と英語でコミュニケーションをしたり，外国人留学生や英語母語話者と模擬授業をしたことによって，現職教員の外国語不安が軽減したり，教員養成課程で学ぶ大学生の指導への自信が高まっている。これらの活動を通して，参加者は，英語での成功体験をし，コミュニケーションの楽しさや意義を自ら体感したからであろう。今後本学においても，これらの成功例を参考にしながら，共通教育科目の英語の授業との連携，外国人留学生との交流，外国人留学生や英語母語話者との模擬授業等を実施し，引き続き，学生の英語への意識や小学校英語に対する不安の変化を調査していきたいと考える。

注

[1] KH Coderとは，立命館大学の樋口耕一氏が開発した，計量テキスト分析またはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである（https://khcoder.net）。

[2] 表記と表現の統一，強制抽出と除外の処理を行っている。ここでは分析手順の説明を割愛する。

[3] 「小学生」「児童」「生徒」→「子ども達」，「自分自身」「私自身」「私」→「自分」，「話せる」→「話すことができる」，「行う」→「行なう」

[4] 「ALTの先生」「スモールトーク」

[5] 「思う」「感じる」「考える」「できる」「英語」「不安」

[6] 「KWIC（Key Word in Context）分析」により原文での語の使われ方を確認した。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所（2011）.「第２回小学校英語に関する基礎調査（教員調査）2010年」http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179（2022年３月28日参照）.

Horwitz, E. K.（1996）. Even teachers get the blues: Recognizing and alleviating language teachers' feelings of foreign language

anxiety. Foreign Language Annals, 29, 365-372.

金子真理子（2011）．第２回 小学校英語に関する基礎調査（教員調査）2010年　解説・提言３「外国語活動」の導入を通してみえてくる学校現場－「自信がなくても授業が遂行できるしくみ」とは何か？－」https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/pdf/data_03.pdf（2022年３月28日参照）．

町田智久・内田浩樹（2015）．「教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の開発」『小学校英語教育学会紀要』第15号，34-49.

松宮奈賀子・森田愛子（2016）．「教員志望学生が英語母語話者とのティーム・ティーチング形式での模擬授業から得る学びと指導への自信」『小学校英語教育学会紀要』第16号，196-210.

文部科学省（2013）．「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342451_01_1.pdf（2022年３月28日参照）．

文部科学省（2015）．「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査の結果概要」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2201/09/24/1362168_01.pdf（2022年３月28日参照）．

物井尚子（2013）．「小学校外国語活動に対する英語科学生の意識調査」『千葉大学教育学部研究紀要』第61巻，9-14.

及川賢（2019）．「小学校外国語に対する教員の不安と今後の研修内容へ向けての提言―英語教育強化事業を経験した地域でのアンケートから―」『埼玉大学紀要　教育学部』68(2)，465-485.

澁井とし子（2019）．「小学校外国語（英語）の教員養成コア・カリキュラム－押さえておきたいポイント－」獨協大学国際教養学部『マテシス・ウニウェルサリス』第20巻第１号，129-151.

東京学芸大学（2017）．『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』https://www2.u-gakugei.ac.jp/～estudy/report/index.html（2022年３月28日参照）．

米崎里・多良静也・佃由紀子（2016）．「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安―その構造と変遷―」『小学校英語教育学会紀要』第16号，132-146.

巻末資料

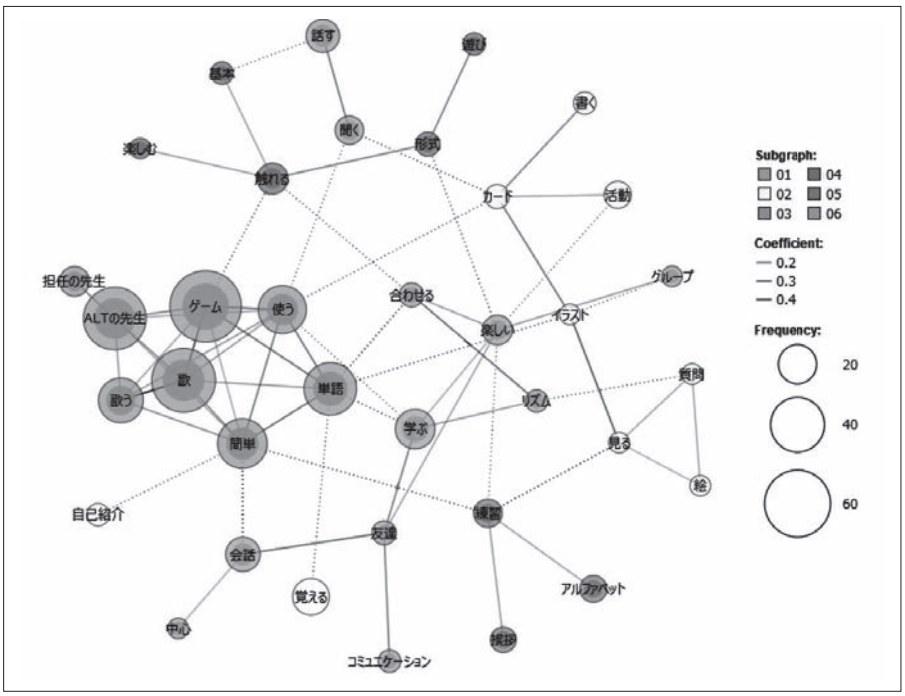

図２　「小学校英語の内容」の共起ネットワーク

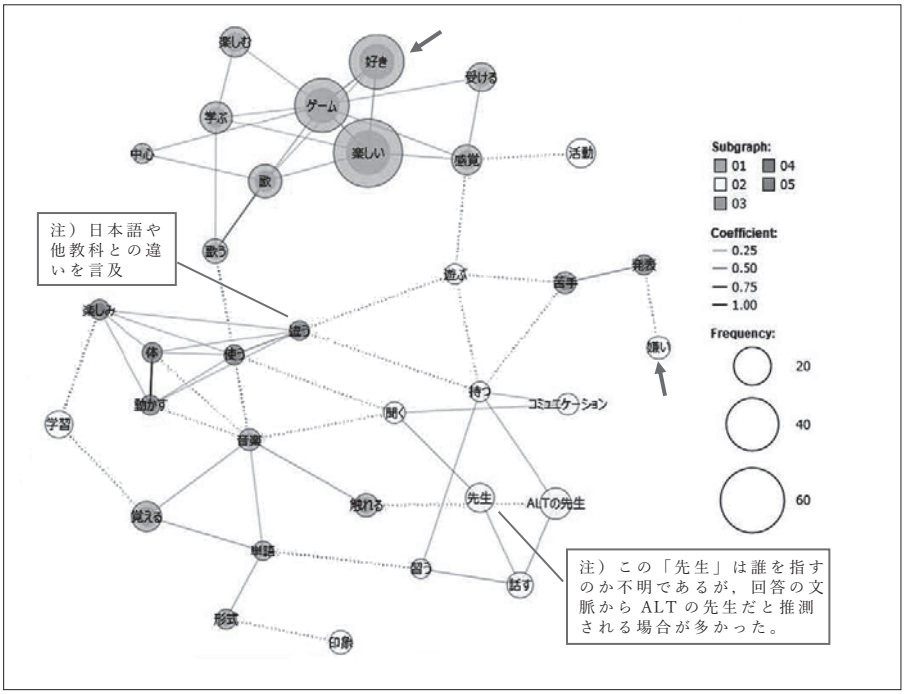

図３　「小学校で英語を好き / 嫌いになった理由」の共起ネットワーク

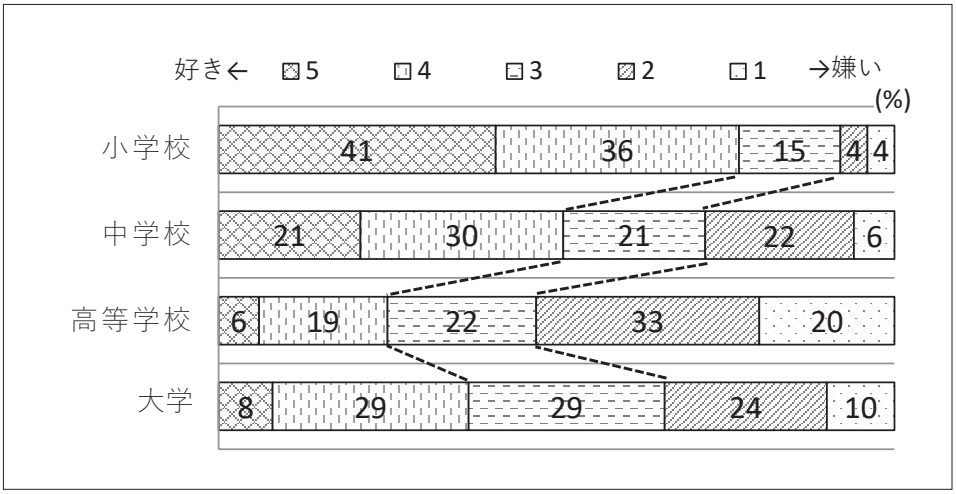

図４　英語に対する意識の変化

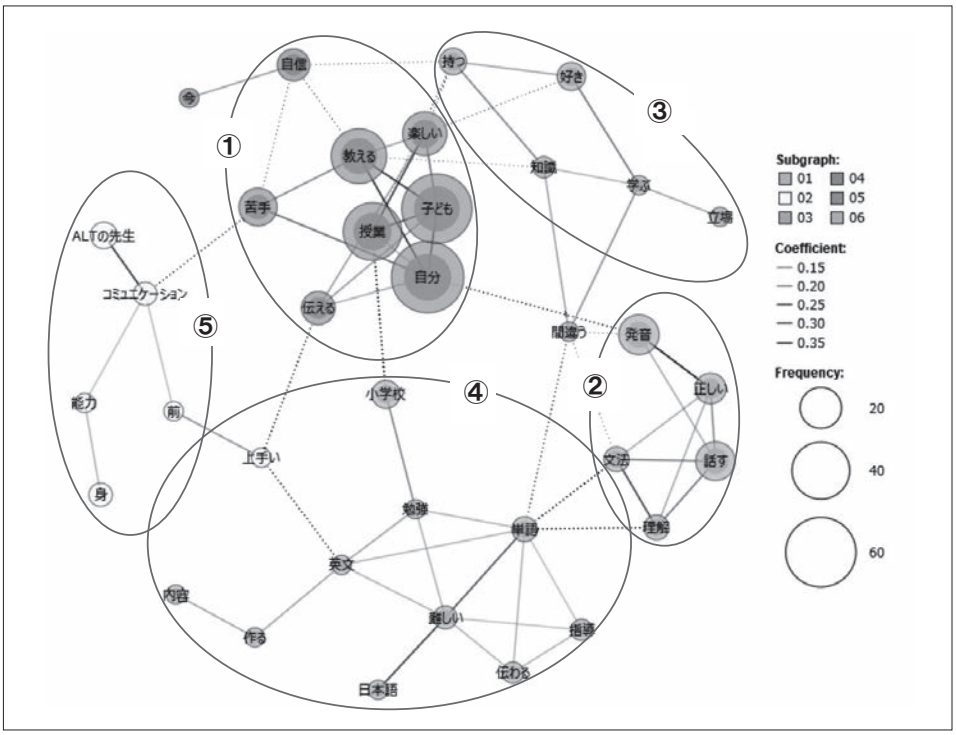

図５　「不安」の共起ネットワーク